2024年12月14日

第52回加藤周一文庫公開講読会　『続羊の歌』を読む

二人の女（1）

日本学術振興会特別研究員
立命館大学授業担当講師
猪原　透

【本章の梗概】

本章ではフランス留学中に加藤周一が出会った「二人の女」とのかかわりをとおして、加藤のみたフランス社会・フランス文化のあり方と、フランス人にとっての日本・日本人のあり方が描かれている。当時のフランス人にとって日本の存在感は、朝鮮半島や中国、インドシナと比べてもごく小さいものであった。本章に描かれる「二人の女」は、そのような状況のなかで日本人である加藤に関心をもった数少ない人たちである。

本章の前半部では「共産主義者」ないし「スターリン主義者」の女性との交友が描かれる。教条的なスターリン主義者である女性は、その世界観を通して日本と日本人に関心を寄せる。加藤と女性は考えの大枠において一致するが、何事にも懐疑的で実際に見なければ判断できないとする加藤と、原理・原則に忠実な女性はすれ違う。

一方、本章の後半部では、日本人の加藤に好奇心を抱いた、パリで画廊を営む中産階級の婦人との交友が描かれる。婦人は労働者の社会から切り離された一種の特権階級に属しており、それ故の余裕と客観的な視点をもつと加藤は感じる。だが、加藤と婦人のあいだにも壁があり、植民地の独立・共産主義者による「抵抗」への見方をめぐって衝突する。

いずれの女性との関係も長続きせず、加藤はフランスを離れ、冬のウィーンへと旅立っていく。

【本章を理解するためのポイント】

①『羊の歌』の基本的な構造

・本書は2章でひとつの主題を扱う。ただし同じことを2度繰り返すのではなく、視点を変え、対比することで主題を浮き彫りにする。これまでの留学以降の時期を扱った章では、
「第二の出発」「詩人の家」……フランスの文学／フランス人の内面的な秩序
「南仏」「中世」……フランスの造形美術／外部に形として表された精神
・「二人の女」もやはり、前章「故国の便」と合わせて読む必要がある。主題はおおよそ共通しており、違いは、「日本からみたフランスとフランスからみた日本」[1]のうち、どちらを軸とするか、という点。

[1] 加藤周一「日本からみたフランスとフランスからみた日本」1952年（『加藤周一著作集10』平凡社、1979年）。

②本章で描かれた対象・時期

・雑誌連載時には「連載小説」であった『羊の歌』は、全体として多くの脚色・虚構を含んでいる（例：「京都の女」）。したがって、本章に登場する「二人の女」が実在するのか、個々のエピソードが実際に起こった出来事なのかも、よくわからない。パリで出会った人々や経験の全体を「二人の女」に集約したのかもしれない。

・本章とおおよそ同じエピソードが、『加藤周一世界漫遊記』（1964 年）のうちの一章「パリの女」に描かれている。ただし、それとは出来事の順番が入れ替えられ、受ける印象もかなり異なる[2]。また、小説『運命』（1956 年）とも共通するエピソードがいくつかみられる。

⇒　記述の真偽にはあまりこだわらず、それを通して何を語ろうとしているのか、という点にだけ注意したい。

・次章以降で描かれる「一人の女」との出会いよりも後（1953 年以降）に起こった出来事も、そうとは明記されずに描かれている。そうと知って読むと印象が変わるかもしれない。

③本章（および前章）の主題と方法

・主題は、フランスの社会や、（言語・習慣と結びついた）人間関係の持ち方。

・フランスを訪れた日本人の反応／フランス人の日本像を縦糸に、フランス社会の直面する重要な問題への対応を横糸にして、上記の主題を描こうとしている。

・加藤は「ヨーロッパ思想・新しい現実との対決」（1956 年）において、戦後西ヨーロッパの「誰の眼にもはっきりした事実または問題」を 4 つ挙げている[3]。

（1）米ソが圧倒的な存在となり、ヨーロッパの地位が相対的に低下したこと。
（2）植民地の独立と民族主義の高まりに直面したこと。
（3）労働問題が社会の決定的問題として意識されようになったこと。
（4）大量生産と機械化にともなう労働の非人間化、社会生活全体の画一化が生じたこと。

このうち（4）を除く（1）～（3）は、本書の基本的なモチーフである。（1）はまた、「戦時下の（フランス人自身による）「抵抗」の評価」という問題に、（3）はまた、社会主義への評価や、ソ連の強制収容所への評価という問題に関連する（カミュ＝サルトル論争）。

④なぜ「二人の女」なのか

・「京都の女」によって日本文化の総合を表現したように、加藤は「二人の女」によってフランス文化を総合的に表現する。それは、「女」とつき合うことで初めて見えてくる、話し方や考え方、人間関係の持ち方、生活のあり方が文化の基礎であるためだろう。また、「女」との関係を通して日本人である加藤とフランス文化との距離を描くことができる。

---

[2] 加藤周一「パリの女たち」（『加藤周一世界漫遊記』毎日新聞社、1964 年）
[3] 加藤周一「ヨーロッパ思想・新しい現実との対決」1956 年（『加藤周一著作集　2』平凡社、1979 年）、123 頁。

・「二人の女」という言葉からは、「美竹町の家」の章で、加藤の父が、加藤の祖父の放蕩を非難し、「二人の女を愛するというのは、誰も愛していないということだ。女遊びにすぎない」と述べたことを連想する。本章の内容と一致しているが、意図的なものかは不明。

⑤本章の構成

・大きく前半と後半に分けられる。前半では、左翼（共産主義者／スターリン主義者）で労働者（学校の教師）の女性との関係が描かれる。後半では、画廊を経営する中産階級の女性との関係が描かれる。一見して対照的に（悪くいえば都合よく）描き分けられている。
・いずれの女性とも加藤は別れることになるが、思想的な対立の結果として描かれているわけではない。それだけにかえって、フランス社会・文化のなかに入り込みきれない壁のようなものを感じさせる描き方になっている。
・なお、本章には雑誌連載時から書き換え／削除した箇所が多くみられる。加藤にとっても書き方を悩んだ章だったのかもしれない。

【第１段落】導入／フランスからみた日本（一般的な傾向）

①その頃、フランスの新聞に、日本に関する記事の出ることは、ほとんどなかった。またフランス人と私が日本について話す機会もほとんどなかった。 ②私は歌舞伎や吉田内閣の話ではなく、Ｔ・Ｎ・Ｐやマンデス・フランス氏の話をして、暮していた――というよりも、そうして毎日を送らざるをえなかった。③ただひとりの例外は、戦前から《ル・モンド》紙の極東特派員として東京とパリとの間を往復していたロベール・ギラン氏であったかもしれない。彼はこういっていた。「フランスの大衆が日本について何を知っているかって？聞き給え、ぼくが日本へ行くまえに、いつも母が訊くのは、こういうことだ、日本でも魚をたべられるだろうか。冗談じゃない、日本にはフランスの十倍もちがった種類の魚がある、といくら説明しても、二、三年してまた出かけるときには、日本でも魚を食べられるだろうか……全くどうしようもないね」。④それはインドシナでフランス軍が戦争をつづけ、板門店で朝鮮の停戦交渉が長びき、日本の経済的な復興が国際的に注目されるよりも数年まえのことであった。私の知人のなかで戦後の日本に、たとえ具体的な知識ではなかったにしても、いくらか関心をもっていたのは、専門家のギラン氏を除けば、左翼の人々だけであったかもしれない。⑤左翼の立場からみれば、フォスタ・ダレス氏の率いる反共十字軍が、世界中のどこで、どういう抵抗に出会っていたかは、強い関心の対象であり、そのかぎりで日本の状況も注意に値したのであろう。 ⑥殊に五二年五月一日以後にはそうであった。その日、日本の大衆は、宮城前の広場で米国人の自動車を焼き払い、戦後はじめて、国際的な世界に登場した。「日本の国民は、次の機会に、どういう形でその意志を表現するだろうか。日本の民族資本家は、どういう機会を捉えて、中国市場の恢復に乗り出すだろうか」――左翼の人々は、日本国民が米国の再武装政策に反対であり、日本資本主義が台湾貿易に満足しているはずはないという前提を、全く疑っていなかったように思われる。

①「その頃、フランスの新聞に……」

・「その頃」は、加藤のフランス到着（1951 年 11 月）から朝鮮の休戦協定（1953 年 7 月）までの期間を漠然と指している。そのため、次章で扱われるイタリア旅行（1952 年 10 月）より後の出来事も扱われている。

・段落全体として「フランス人の日本像」に関する一般的な話が書かれている。その書き出しは特に一般的な話（新聞の論調）で、そこから加藤の見聞へと移っていく（一般→特殊）。

②「私は歌舞伎や吉田内閣の話ではなく、T・N・Pやマンデス・フランス氏の話をして…」

・ＴＮＰ（フランス国立民衆劇場）については「詩人の家」第 7 段落にも言及がある。1951 年に責任者に就任したジャン・ヴィラ―ルのもと、ジェラール・フィリップなどの俳優が活躍した。マンデス・フランス（1907－1982）はフランスの政治家。インドシナ戦争における政府の対応を批判し、のちに首相としてジュネーヴ協定を締結、ベトナムの独立を認める。

・当時のフランスにおいて社会主義や植民地の独立が重要な関心事であったこと、それと比べて「歌舞伎」（ＴＮＰに対応）、「吉田内閣」（マンデス・フランスと対応）に関心を持つ人は少なかったことを示す。

③「ただひとりの例外は、戦前から《ル・モンド》紙の極東特派員として……」

・一般的な傾向を説明したあと、例外に言及し、例外の視点を通して一般的な傾向を浮き彫りにしている。魚に関する話題が出されるのは、それが実際に生活しなければわからないものだから（政治に関する話題との対比）。

・ロベール・ギラン（1908－1998）は『ル・モンド』の記者として活躍した国際的ジャーナリスト。日本の敗戦後、政治犯が釈放されていないことを報道したことで知られる。ただし、『ル・モンド』の記者となるのは戦後のこと。加藤との交流がいつごろ始まったのかは不明だが、「知識人について」（1957 年）にギランから直接聞いたという話が引かれている[4]。その後も『山中人閒話』『夕陽妄語』でギランに何度か触れている。

④「それはインドシナでフランス軍が戦争をつづけ……」

・ここでは 1950 年代前半にアジアの 3 つの地域（インドシナ、朝鮮、日本）で行った出来事が列挙されている。ひとつは「戦争をつづけ」、ひとつは「停戦交渉が長びき」、ひとつは「復興」へと向かっている。

・アジアのなかで、とくに日本への関心が薄い、ということが示されている。

「中国・インドはほとんど毎日〔フランスの〕新聞の上にあらわれる。日本が月に一度、それも三、四行ということになれば、問題は中国やインドともちがうのである」[5]。

---

[4] 加藤周一「戦争と知識人」1957 年（『日本の内と外』文藝春秋、1969 年）、167 頁。

[5] 前掲「日本からみたフランスとフランスからみた日本」、213 頁。

⑤「左翼の立場からみれば、フォスタ・ダレス氏の率いる反共十字軍が……」

・ダレスについては、「詩人の家」第 5 段落に言及がある。アメリカの「反共」政策への抵抗という（フランスの左翼と共通する）問題意識から日本は注目された。「その限りで」ということは、日本の個別の事情への関心は弱いということ。

⑥「殊に五二年五月一日以後にはそうであった」

・講和条約の発効は紙面の片隅に出る程度であったが、その 3 日後に皇居外苑で起こった、いわゆる「血のメーデー事件」を『ル・モンド』は一面で取り上げた。理由は占領軍の自動車を焼き払ったため。その反面、日本共産党の武力闘争路線との関係（＝日本の国内情勢の分析から生まれる解釈）には触れない。

「その頃のパリの街頭には、いたるところに「アメリカ帰れ」の落書きがみられた。また『ル・モンド』が事件と共産党の武力革命方式決定との関係を強調しなかったのは、おそらく、自動車を何台か焼くことと武力革命との間には、何等の関係もないと考えていたからであろう」[6]

【第 2 段落】共産主義者の女性（1）／女性の日本像

①日本国の内情はそれほど簡単でない、と私は知人の共産主義者に説明しようとしたことがある。しかし彼女は容易に譲らず、日本を武装解除し、十年も経たぬうちに再武装を迫るのは、日本国民を愚弄するものだろう、といった。「それで彼らが満足しているはずはない」「しかし実際に朝鮮の特需で景気がよくなったという面もあるのだ」「いくさでもうけたのは資本家で、国民ではないと思う」「いや、つぶれかかった企業がたち直れば、労働者も救われますよ」「それは二次的現象にすぎない。事の本質はそのために変らないと思う」「しかし大衆は事の本質についてではなく、たとえ二次的であろうとも、直接の現象に即して、満足したり、不満を覚えたりするわけだ」「心理的反応は不安定なものにすぎない」と彼女はいった、「事の本質が、大衆の潜在的な不満を決定する。それが顕在化するかどうかは、その場の状況によるのです」「だから、その場の状況が、あなたの考えるほど簡単でないといっているわけだ」「そうかもしれない、しかし米国帝国主義の利益が日本の人民の利益と一致するはずがない……」。いや、そもそもそれが日本民族資本の利益とさえも一致するはずがないから、いつかは日本政府も米国の圧力に抗して、中国貿易の拡大を考えるだろう。「日本は原料を輸入しなければならない、だから製品を輸出しなければならない。日本製品の輸出市場としては、欧米の工業先進国よりも、中国が大切でしょう。日本経済が中国なしに、いつまでもやって行けるはずはない……」――②長い眼でみれば、そうであるかもしれない、と私も思っていた。しかし短い眼でみれば、これまたそう簡単に断定できない面があるだろう、という話も私たちはしていた。

[6] 前掲「日本からみたフランスとフランスからみた日本」、215 頁（著作集の「追記」）。

①「日本国の内情はそれほど簡単ではない、と私は知人の共産主義者に……」

・前段落で「左翼の人々」の一般的な傾向を説明し、本段落ではより具体的な例を挙げる。フランスの直面する問題（米ソの圧倒的な存在感、植民地の独立とアジアのナショナリズム、労働運動・社会主義の高揚）を日本にあてはめて見たとき、具体的にどのような理屈が用いられるかが描かれている。

・ここで加藤は、知人の女性を「左翼」ではなく「共産主義者」とはっきり書いている。彼女の以下の主張が、広い意味での「左翼」よりも限定された、共産主義の教条的な主張であることを示すためか（米国帝国主義への批判、帝国主義で利益を得る資本家／搾取される国民の二分法、「民族資本」を反帝国主義勢力とする位置づけ etc）。彼女からみれば、「血のメーデー事件」は米国帝国主義に対する日本国民の反抗、ということになる。

②「長い眼でみれば、そうであるかもしれない……」

・「長い眼」に基づく（現実離れした）「理想主義」と、「短い眼」に基づく（理想を欠いた現状肯定的な）「現実主義」については、「風向きの変化と日本の現実主義」（1958 年）に詳しい。

・彼女は「～はずがない」を繰り返しており、それが内容の分析に基づかない教条的な主張であることが示されている。ただ、彼女の主張が「事の本質」を捉えたものであることは認めており、加藤の考えとの距離はそれほど遠くない。

【第 3 段落】共産主義者の女性（2）／女性から受ける印象

①彼女はルーマニア系のユダヤ人であった。小柄で、痩せて、肌は浅黒く、眼はいつも活気にみちて輝いていた。さりげなくみえて、その服の色も、その布の粗い手ざわりも、またその裁ち方も、すべてがその小さな身体と、黒い髪と、活動的な挙措に、よく似合い、よく調和し、一種の、ほとんど洗練というのに近い印象をあたえた。②結婚していたが、夫が何をしていたのかを私は知らない。「そんなことは、あなたに関係ないでしょう」――「よく日曜日に家を空けることができるね」と私はいった。「できるから、出て来たのです、そんなことをあなたが心配する必要はない……」。彼女自身は学校の教師をしていた。そして熱烈にスターリンを崇拝していた。③「あなたはピカソの肖像画をどう思うか」。それはフランス共産党がその肖像画を、スターリンの権威を冒瀆するとして、激しく批判していたときのことである。私はピカソ自身の言葉を想い出していた、「資本主義社会だろうと、社会主義社会だろうと、靴屋の釘の打ち方に相違のあるわけがない」――④「誰の肖像画をつくっても、同じことであるとすれば」と彼女は論じた、「なにもスターリン像とする必要はなかった。スターリンは、私たちにとって、特別の意味をもっています。故意にその意味を冒瀆することは……」。

①「彼女はルーマニア系のユダヤ人であった。小柄で、痩せて、肌は浅黒く……」

・さきほど問答を交わした共産主義者の女性の人物像が描かれている。まずは人種、外見という表面的な印象の描写から始まり、話し方、そして思想信条へと進んでいく。

・「ルーマニア系のユダヤ人」である彼女はフランス社会にとって少数派であり、服装からはそれほど裕福ではない、労働者階級に属することがうかがえる（⇔「中産階級の婦人」）。

・体格は「小柄」、肌は「浅黒」、眼は「活気にみちて」おり、服装もまた「小さな身体」「黒い髪」「活動的な挙措」に調和しているという。

②「結婚していたが、夫が何をしていたのかを私はしらない……」

・彼女の言葉を通して、物事をはっきり言わない日本人には厳しく感じさせる話し方、人間関係の持ち方（＝フランス語・フランス文化の特質）を描こうとしているように思われる。

・夫の存在を感じさせないという点では、やはり「私と関係のない生活を記念する品物が多すぎた」（第 10 段落）中産階級の婦人との対比を意識している。

③「「あなたはピカソの肖像画をどう思うか」。それはフランス共産党がその肖像画を……」

・「どう思うか」のあとに続く文章は、雑誌連載時は以下のものであった。

> 共産党はその肖像画を、スターリンの権威を冒涜するとして、激しく批判していた。そのことを私は新聞で知っていたが、スターリンに似ていないその肖像画、というよりも粗描が、そもそも似させることを目的としたものではないと私は考え、ピカソ自身の言葉を想出していた。

・スターリンが死去したあと（1953 年 3 月）、ルイ・アラゴンの依頼でピカソはスターリンの肖像を描いた。アラゴンが編集長を務める共産党系の雑誌でこの肖像が発表されると、スターリンの威厳を損ねるとして非難された（背景には社会主義リアリズムに基づく前衛芸術への批判がある）。

・「パリの女たち」（1964 年）に同様のエピソードが描かれている。ただしそこでは、本章第 8 段落の話題のあと、「話をスターリンに戻して」女性と議論したとされる（後述）[7]

・「靴屋の釘のうち方」は、ピカソ自身が共産主義者であり、自身の絵が共産主義の絵であることを認めつつ、しかし自らの政治姿勢を示すために特別な方法で絵を描くことはしない、という趣旨を述べたもの。

④「「誰の肖像画をつくっても、同じことであるとすれば」と彼女は論じた」

・加藤の言葉に彼女は納得せず、あくまでピカソの肖像画がスターリンの威厳を損ねたことを非難し、議論は平行線に終わっている。

・雑誌連載時は、「故意にその意味を冒涜することは……」のあと以下の文章が続いていた。

---

[7] 前掲「パリの女たち」、127－8 頁。

そのとき、彼女が「党の方針」を説いていたのか、自分の考えを述べていたのか、私には区別することができなかった。おそらく当人にも区別できなかったのかもしれない。「偉人の崇拝は、私の習慣ではない、スターリンにしても、Schweitzer にしても」と私はいった。

・前章末尾で、「私が愛したかもしれないひとりの娘の心の傷と、伝説的な人物〔シュヴァイツァー博士〕の名声や権威とを、断じて交換しない」と書いたのを踏まえている。

【第 4 段落】共産主義者の女性（3）／加藤との考えの一致・態度の相違

①しかしピカソについてほど、スターリンについて、あるいは少くともソヴィエット権力について、私の意見が彼女の意見から遠かったわけではない。 ②その頃西欧側の「ソ連問題専門家」のいうところによれば、スターリンは毎年一度危篤であり、今にも死にそうであり、独裁者が死ねばソヴィエット体制は、混乱し、崩壊するはずであった。しかし毎年スターリンは、死ななかったし、ソヴィエット体制は――もちろんスターリンの死後にも崩壊しなかった。私は西側の新聞にあらわれた「ソ連問題専門家」の意見を信用しなかった。 ③彼らは強制収容所と秘密警察について書いていた。彼女は「それは反動的新聞の宣伝にすぎない」と断定した。私はそうであるかもしれないし、そうでないかもしれない、と考えていた。私はまだ自分の眼でソ連邦を見たことがなかったし、直接のどんな資料も持っていなかったからである。 ④「独ソ協定はミュンヘン会談の裏切りに対して社会主義権力がとった自衛手段にすぎない。一体独ソ協定でなくて、どうすべきだったとあなたは思うのか」――どうすべきであったか、という答えが私にあるはずはなかった。「フィンランド？ 待っていれば、ドイツ軍が先に入ってきたでしょう。戦争ははじまっていたのですよ。スターリンがはじめたのではない戦争が」。私は一九一七年以来、ソ連邦の領土内に軍隊を送ったのは、西欧側帝国主義であり、ソ連側からいくさをしかけたことはないはずだ、という彼女の指摘を認めないわけにはゆかなかった。「対日宣戦は、日本の同盟国の対ソ宣戦の後でおこったことで、先ではありませんよ」と彼女は念をおした。④私と彼女とのちがいは、彼女が断定的で、旗幟頗る鮮明であったのに対し、私が懐疑的で、条件つきでなければ何事にも賛成しないということにすぎなかったのかもしれない。

①「しかしピカソについてほど、スターリンについて、あるいは少くとも……」

・加藤は青年期に社会主義を学ぶ一方、戦前の社会主義運動の崩壊過程を直接に経験したわけではなかった。また、「第一・第二次世界大戦の前後を通じ〔中略〕戦争に対し勇敢な反対を続けた者は、悉く広い意味での社会主義者」であると加藤は見ていたため[8]、社会主義・共産党に対してもおおむね肯定的な態度をとった。

[8] 加藤周一『現代フランス文学論　1』（銀杏書房、1948 年）、136 頁。

②「その頃西側の「ソ連問題専門家」のいうところによれば……」

・「ソ連問題専門家」と括弧つきなのは、揶揄的な意味であろう。なお「私は西側の新聞に～」の一文は、雑誌連載時は「よほどの馬鹿でなければ、西側の新聞にあらわれた「ソ連問題専門家」の意見を鵜呑みにするわけにはゆかない」と、より強い表現であった。

・ソ連の脅威を喧伝しつつ、それが今にも崩壊しそうであると主張するのは、昔の戦時プロパガンダから今の北朝鮮・中国論と同じであり、鵜呑みにできないのも同様。

③「彼らは強制収容所と秘密警察について書いていた。彼女は……」

・マーシャル・プランの反動的性格を批判して、なぜソ連の強制収容所は非難しないのか、というのはカミュ＝サルトル論争（1952 年）の論点のひとつ[9]。留保なく「反動的新聞の宣伝にすぎない」と断定する女性の態度は、後述する中産階級の婦人の態度（共産主義者の「抵抗」への評価）と対照的。

・何かについて書くなら実際に自分の眼で見る、実際に見ていないのなら書かない、というのが加藤の立場である。ここで「私はまだ自分の眼でソ連邦を見たことがなかった」ことが記されるが、のちに加藤はアジア・アフリカ作家会議に参加し社会主義圏を訪れ、それを契機に医業を廃する。そのことを描く伏線として、「まだ」ソ連邦を見たことがなかったが、見る必要は感じていたことを記したのだろう。

④「独ソ協定はミュンヘン会談の裏切りに対して社会主義権力がとった自衛手段に……」

・独ソ協定（＝ポーランド分割）、フィンランド侵攻（冬戦争）、対日宣戦というソ連の拡大政策と、それを自衛として正当化する理屈（＝ソ連の公式見解）が語られる。加藤自身もソ連の（軍事に偏重した）体制が、シベリア出兵をはじめとする西側の干渉に対する「自衛」的な性格を帯びていると考えているので、彼女の指摘に理があることを認める。

・しかし、（少なくともこの文章を書いた時点において）彼女の主張をそのまま認めたわけではなく、実際に資料を読み、現地を訪れなければ、明確なことは言えない、と考えていたことがうかがえる。

⑤「私と彼女のちがいは、彼女が断定的で、旗幟頗る鮮明であったのに対し……」

・考えに根本的な違いはなく、異なるのは考えとの向き合い方だけである。意見に対してまっすぐな彼女と、何事にも懐疑的で留保をつけようとする加藤。

・二人の別れ（第 8 段落）も、意見の違いではなく、意見との向き合い方の違いによって生じることになることが予告されている。

---

[9] 前掲「ヨーロッパ思想・新しい現実との対決」、146－153 頁。

【第 5 段落】フランス人からみた加藤（1）：外面的な印象

①私は若くみえた――ろうと思う。実際には、彼女との間にほとんど年齢のひらきがなかったはずだが、彼女は私を十年若く考えていたらしい。そういうことは、私の場合にかぎらず、西洋人を相手にした日本人の男には、しばしばおこる。②活動写真の小屋で、未成年者とまちがえられ、入場を断られるということは、さすがに私にはなかった。　③しかしその後十年も経って、外国の大学で講義をしていたときに、学生とまちがえられることは、少なくなかった。

①「私は若くみえた――ろうと思う」

・第 3 段落では「加藤からみた共産主義者の女性の印象」が描かれているのに対し、この段落ではそれを逆転させ、女性からみた加藤の印象が描かれている。ただしそれは、当然のことながら、推測にとどまる（「ろうと思う」）。

・実年齢よりも若く見られるのは、当時から現在まで、西欧を訪れた日本人がしばしば経験することである。加藤が帰国からまもない時期に執筆した『運命』でも、主人公のひとりである白木三郎（年齢は 40 歳近く、日本に妻子を残している）は「年よりも若くみえ」、恋人のマルタやその家族も、白木に妻子がいるとは考えない[10]。

②「活動写真の小屋で、未成年者とまちがえられ……」

・「映画館」ではなく「活動写真の小屋」であるのは、戦前の「活動写真の小屋＝不良少年の温床＝取り締まりの対象」というイメージがあるためか。

・「A でなかった。しかし B であった（B した）」という表現（not A but B）を加藤は頻繁に用いる。この場合は、加藤の見た目の印象をはっきりさせるため、未成年者に見えるほどではないが学生には見える、と述べている。

③「しかしその後十年もたって、外国の大学で講義をしていたときに……」

・ブリティッシュ・コロンビア大学のこと。共産主義者の女性からは実年齢より 10 年若く（つまり 20 代前半）に見られ、その後 10 年たっても 20 代前半と見られたことになる。

・雑誌連載時は段落の最後に以下の文章が続いていた。

「どんな講義を聞いていますか」「いや、まだ何も聞いてはいません」と答えることを、そのとき、私は愉しんだ。たとえまちがいにもとづくにしても、けだし青春の特権は、《incognito》（匿名微行）の便宜にあるだろう。

削除されたのは、主題から外れると考えたためか。

[10] 加藤周一『運命』（講談社、1956 年）、60 頁。

【第 6 段落】フランス人からみた加藤（2）：アジア諸民族への理解と無理解

①私はまた、私自身の容貌が、シナ人またはインドシナ人または中央アジアの「黄色人種」としても、充分に通用するらしい、ということに気がつくようになっていた。それは西洋人からみて、というばかりではなく、当の東洋人からみても、そうであるらしかった。②話が前後するが、後日中央アジアの町タシュケントへ行ったときに、私はウズベキスタンの地方語で道をかれたことがある。そのとき私は、「ロシア語を話せない」とロシア語でいうことができたが、ウズベキスタンの言葉を話せないとその言葉でいうことはできなかった。いわんや西洋では、東洋人を一括し、シナ人をもって代表させることが多い。ローマの裏街では、子供たちが、「シナ人、シナ人」と叫びながら私の周りに集り、彼らの街を見物している私を見物していた。パリでは、私はインドシナ人であった。その頃のパリには仏領インドシナの留学生が多かったからである。③あるとき地下鉄の駅で中年の男が話しかけてきた、「君はパリで何をしているのか」「医学を勉強している」と私は短く答えた。いくらか酒気を帯びた男はいった、「いつ国へ帰るつもりなのか」。私はとり合わなかった。「帰りたくないのか、国で同胞が苦労しているときに。彼らこそほんとうの愛国者ではないか。フランスに暮していることを恥ずかしいとは思わないのか……」。④男はいよいよ雄弁になった、「君の同胞が戦っているのだ、バオ・ダイは南仏で遊んでいる、あれは植民地主義の道具にすぎない。国が独立のために戦っているときに、フランスで暮しているということが……」――その男の雄弁は、むろん、私が日本人である、といって相手の注意を喚起したときに終った。

①「私はまた、私自身の容貌が、シナ人またはインドシナ人……」

・前段落から引き続き、加藤の外面に関する話題が書かれている。しかしそのあと、外面を通して加藤がシナ人・インドシナ人と誤認され、一方的な批判を受ける姿が描かれる。

⇒　フランスにおける植民地独立・アジアのナショナリズムへの関心の高さと、アジアの内情・個別の事情に対する関心の薄さ。

・「左翼の人々」や「共産主義者の女性」は「アジア」「日本」に向けて上記のような関心をよせたが、この段落では加藤という個人へと関心が向けられる。具体的な人と人の交渉・関係を通して、フランス人がアジア・日本へと向ける関心がどのような性格のものであるかを示している。

（写真：著作集 8 巻より、1957 年頃）

②「話が前後するが、後日中央アジアの町タシュケントへ行った時に……」

・地方語で話しかけられた加藤は、ウズベキスタン（当時はソ連邦の一部）で使われている諸言語の違いを区別して正確に返答することができず、（民族を越えて使われる）公用語のロシア語で返答することしかできなかった。「いわんや」西洋人には、東洋の諸民族の違いがわかるはずもなく、東洋人はみな「シナ人」に一括されてしまう、ということか。

③「あるとき地下鉄の駅で中年の男が話しかけてきた」

・「私はとり合わなかった」のは、男が酒気を帯びていたのと、こうした経験（「いつ帰るのか」と聞かれること）が何度もあったためだろう。

・雑誌連載時には、「恥ずかしいとは思わないのか……」のあと以下の文章が続く。

> 怒鳴りつけようかと思ったが、同時に少し様子がおかしいということにも、私は気がつきかけていた。

⇒　雑誌連載時の書き方では、男に話しかけられた当初はインドシナ人と誤認されていることに気づいておらず、「日本で」苦労している同胞を後目にフランスで優雅な生活を送っているという非難として受け取っていることになる。しかしこの文章が削除され、加藤は話しかけれた時点で自分がインドシナ人と誤認されていることに気づいていたように読める。

④「男はいよいよ雄弁になった」

・雑誌連載時ではここで、加藤はインドシナ人であるという誤認されていることに気づく。

・バオ・ダイはフランスの傀儡政権（ベトナム国）の元首。フランス留学性は「南仏で遊んでいる」バオ・ダイと同じである、という批判。

・「その男の雄弁は」は、雑誌連載時には「その弾劾は」。「弾劾」から「雄弁」へと変更されたことで、皮肉な調子が強まっている。

【第 7 段落】共産主義者の女性（4）：人種的偏見

> ①人種的偏見は、少くとも私自身が日常生活において、そのために不快な経験をするようなものではなかった。しかしルーマニア系のユダヤ人は、しばしば人種差別を話題にした。②「彼らがなぜ広島に原爆をおとしたと思いますか。広島に住んでいたのが、東洋人だからですよ」「東洋人だということも、いくらか作用していたかもしれない」と私はその言葉を訂正した。「パリでは人種的偏見がめだたない？　どうしてそういうことがいえるのかな。これほど人種的偏見の悪どいところも少いではありませんか」と彼女はいっていた。それは東洋人に下宿を断るという形ではあらわれていない。しかしたとえば男女のもう少し親密な関係においてあきらかだ、というのである。③それはほとんど、自分だからあなたとつき合っている、他の女はそうはゆかぬだろう、というのに近い印象を、私にあたえた。その印象は、私にとって愉快なものではなかった。私は誰に対しても膝を屈してそのつき合いをもとめることはしない――いや、少くとも、そうしたくはないと考えていた。

①「人種的偏見は、少くとも私自身が日常生活において……」

・前段落では、加藤がイタリアでは「シナ人」、パリでは「インドシナ人」とみなされたことが描かれている。加藤という個人ではなく「～人」とみなされることは、むろん、人種的偏見をともなう。本段落ではそれを、加藤と女性との日常的な交際を通して描く。

・ロンドンで経験した人種的偏見およびパリとの対比は「海峡の彼方」の章で扱われる。

②「彼らがなぜ広島に原爆をおとしたと思いますか……」

・女性の主張（ホロコーストが背景？）は日本やアメリカに関する具体的な資料に基づいたものではなかったが、加藤自身もそれを肯定したり、否定したりするに足るだけの資料をもっていたわけではなかったから、「いくらか作用していたかもしれない」と留保。なお、加藤はこの問題について「ソ連の参戦前に日本を降伏させる（＝冷戦を有利に進める）ための原爆投下」という（通説的な）見方に説得力を感じていたようである[11]。

・雑誌連載時には「私はその言葉を訂正した」のあと、以下の文章が続く。

「確かに」と彼女はいい、「もしかすると」と私は繰り返した。

この文章が削除されたことで、会話の一方通行感が強まっている。

③「それはほとんど、自分だからあなたとつき合っている、他の女はそうはゆかぬ……」

・「私にとって愉快なものではなかった」は、雑誌連載時は「私を傷つけずにはいなかった」。

・親しく、対等であると考えていた関係が、実はそうではなかったと気づいたときのショックは大きかっただろう。ただ、それは加藤と共産主義者の女性との関係を描くためだけに、この話題が挿入されているわけではないだろう。

⇒　フランス人の文化的優越感と、それを前提にしたうえでの親切さや異文化理解、それらを乗り越えた真の親切や異文化理解の難しさを女性が体現している、ということか。

・同様に、「私は誰に対しても膝を屈してそのつき合いをもとめることはしない」も共産主義者の女性との関係のことだけが言われているのではなく、広く加藤とフランスとの関係の持ち方、加藤の身の処し方が問題とされているのではないか。

【第 8 段落】共産主義者の女性（5）：別れの場面

①私と彼女とのつき合いは、ながくは、つづかなかった。ある日彼女は、静かなところで、たとえば私の部屋で話したいといった。そのとき市中の小さな宿に泊っていた私は、彼女を部屋に案内し、②扉を半開きにしたまま、雨外套を脱ぐのを手伝った。外には霧のような雨が降っていた。安楽椅子にかけて、彼女は部屋を見し、「清潔なのね」と意味もなく呟き、また起ちあがると、半開きの扉をしめて、鍵をおろした。私は黙っていた。③「あなたは医者でしょう」と彼女はいい、返事を待たずに、身体の具合が悪いから診てくれないか、といった。私は開業しているのではないし、必要な道具も持ちあわせていないから、診るわけにはゆかない、と説明し、しかし話を聞いて相談にはのるつもりだ、とつけ加えた。「道具がなくても、わかると思う」と彼女はいった。たしかに顔色が悪く、疲れてみえた。「いや、わかるかわからないは、まず詳しい話を聞いた上で、こちらが決めることだ、そもそも何処がわるいのか言って下さい」。しかしその話は要領をえなかった。漠然と胃が悪く、腸が悪く、何かの病を想像させるような特定の症状があるわけでもない。私は詳しい話をもとめ、

[11] 加藤周一「何故原爆を落としたか」1989 年（『夕陽妄語 1』ちくま文庫、2016 年）。

彼女はもどかしそうに「診てくれますか」をくり返した。そして突然、起ちあがると、上衣を脱いで、寝台に横になった。黒い下着の下に骨の細い上半身があり、胸が静かに上下していた。診察をするためには、その上にかがみこまなければならない。「診察」はそれだけで終らぬだろう。せまい部屋のなかで、寝台と私のかけた椅子との間には、三歩ばかりの距離があった。その距離を保つべきか、越えるべきか。私は一瞬間迷った。そして、「いや、診る必要はないと思う」といった。「変な人ね」と彼女は思ったよりおだやかな声でいった、「それでは、どうすればよいか、処置を説明して下さい」。しかし彼女自身にとっても、もはや、そういう話題に意味のあるはずはなかった。雨外套の襟をたてて、霧雨の舗道へ出てゆくとき、なにごともなかったように、④彼女は、《オ・ルヴォアール》といった。しかし私たちは再び会わぬであろうことをはっきりと知っていた。

①「私と彼女とのつき合いは、ながくは、つづかなかった」

・前段落で「私は誰に対しても膝を屈してそのつき合いをもとめることはしない」とあるように、加藤はつき合いをもとめず、女性との関係は破綻する。

・この別れの場面と同じ記述が、「パリの女たち」(1964 年) にある。ただしここでは、日本の存在が映画『羅生門』によってのみ知られていたという話から始まり、そのあと「診察」を求められ（本段落と同じ)、そのあと「私は話をスターリンに戻」してピカソの肖像画について議論し、加藤の「ピカソは、だれの肖像を描いても、人物の威厳に興味はないようですね」という言葉に彼女は「冗談じゃない……」といって決別、という流れになっている。

⇒　意見の違いによる決別、というニュアンスが弱まり、「別れ」の意味が変わっている。ただ、(おそらく実際の出来事なのだろうが) 展開があまり急で、彼女の人物像が伝わってこない。それだけつき合いが浅かったということかもしれないが。

②「扉を半開きにしたまま」

・「男女のもう少し親密な関係」を期待しているわけではない、というサイン。

・しかし彼女は「半開きの扉をしめて、鍵をおろした」。

③「「あなたは医者でしょう」と彼女はいい、返事を待たずに……」

・強引に診察をもとめるが、説明は要領を得ず、本来の意味での「診察」をもとめているわけではないことがわかる。

・加藤は結局「診察」を拒否する（女性に恥をかかせる）が、女性の反応は「思ったよりおだやか」であった。

④「彼女は、《オ・ルヴォアール》といった」

・二度と合わないなら「アデュー」だが、そうではなく、何事もなかったように（また明日会うかのように)「オ・ルヴォアール」と彼女は言った。しかし実際は……ということ。